

主催者挨拶

下田町観光協会

会長 川口 彰五郎

ご来場の皆様、悪天候の中ご来場いただき、誠にありがとうございます。第1回しもだ白鳥フォーラムを本日開催することとなりましたが、このようなフォーラムはこれからも継続して開催する必要があると思われまます。ふれあい白鳥デーが今年で16回目を迎えるわけではありますが、ただイベントばかりを行うだけではなく、やはり白鳥のことをもっともっと勉強することが必要であります。

本日は基調講演の講師として、はるばるむつ市より日本野鳥の会副会長でいらっしゃる古川博先生にお越しいただいて、白鳥に関する専門知識を提供していただくこととなっております。古川先生は白鳥に関して日本中を調査しておられ、かなり白鳥に関して詳しい方であると聞いております。

また、基調講演終了後には、「望ましい白鳥保護環境の創造」と題して、パネルディスカッションを行うこととなっております。パネリストには、下田町長、下田町白鳥保護監視員の蛭名さん、日本野鳥の会青森県支部三沢野鳥の会会長の津曲先生をお招きしております。私は白鳥に関しては素人ですが、今日は私自身しっかり勉強させていただきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

また、このフォーラムは「しもだ白鳥を愛する会」と共催となっております。今日は会員の方々も多数参加されているようでございますので、活発なご意見を期待しております。よろしくお願いたします。

来賓挨拶

下田町長 袴田 健義

今日は町内のみならず、町外からも多くの方々のご参加をいただき、本当にありがとうございます。

この白鳥飛来地間木堤を含む下田公園は、整備もほぼ完成を向かえるわけですが、町内外の方からも大変好評をいただいております。特に白鳥が飛来するシーズンになると、数多くの方々のご来場をいただいております。私も大変うれしく思っているところであります。

また、明日の3月3日には、白鳥とのお別れ会でもあります「ふれあい白鳥デー」が開催されます。今回で16回目を迎えるわけですが、その前日に第1回目のしもだ白鳥フォーラムを開催することとなりました。専門家の先生方からのお手伝いをいただき、基調講演、パネルディスカッションを行うこととなります。

今日は、白鳥を初めとする間木堤の自然環境について、じっくりとお話することができると思います。本日のフォーラムでの活発な意見交換をしていただき、そして明日のふれあい白鳥デーにも皆様お越しくくださるようお願い申し上げます。簡単ではございますが挨拶といたします。ありがとうございました。

基調講演

「白鳥の生態及び青森県内における白鳥保護活動について」

日本白鳥の会 副会長 古川 博



みなさんこんにちは。基調講演ということで、私も若干緊張しております。日本白鳥の会の副会長という肩書きでございますが、私の副会長は、くちへんに欠けると書いて「吹く」会長でございます。日本白鳥の会に入ったのは、「何処へ行っても白鳥のように『吹いて』来い」ということになったのかもしれませんが。私は水鳥が特に大好きです。今日は講演というよりも、むしろ日頃から親しんでいる白鳥に関する様々な情報を皆様にお伝えできればと考えております。

本日の講演テーマは、「白鳥の生態及び青森県内における白鳥保護活動について」となっております。

まず最初ですが、ちょうど一昨年前の2000年に、日本鳥学会において、日本で確実に記録された鳥の名前について「日本鳥類目録第6版」として整理しました。それまで鳥学会ができてからは第5版までは改訂版が出版されておりましたが、それ以降はなかなか出版されないでございました。というのは、鳥に対して観察する人が増えてきたこと、記録に残すための機器類が精密になっ

てきたこと、提供される情報の多様化などのために、なかなか整理できなかったのではないかと思います。こうした中で、誰が見ても「この鳥だ!」と間違いなく分かるように整理・検討するまで、結局は20年も月日が流れてしまいました。こうして何とか2000年に、第6版が出版されたわけです。この第6版の改訂については、日本野鳥の会の出版雑誌「野鳥」や、国内雑誌として最も充実している雑誌だと思われる「Birder」などでも特集として取り上げられております。

それでは、まず「白鳥」という名前について、資料1をご覧ください。ここでは、鳥類目録作成の委員会メンバーでもあった山階鳥類研究所の柿澤亮三さんが「鳥の名前」について述べております。全ての生物には名前がついておりますが、その名前には世界共通の名前として、ラテン語やギリシア語を基準にした「学名」がつけられております。その他の名前については、「俗名」であります。白鳥に関して、日本国内だけで20ほども方言による名前の違いがあります。日本全国共通の名前として通じている「コハクチョウ」という日本名は、俗名の中でも「和名」あるいは「標準和名」となります。

【資料1：学名と俗名（「野鳥（No.648）」（2001年12月号）より）】



次に資料2をご覧ください。

【資料2：白鳥の種類（村瀬正夫氏「北上の白鳥を勉強しましょう」より）】

	和名及び学名	英名	分布	
1	コブハクチョウ <i>Cygnus olor</i>	Mute Swan		
2	コクチョウ <i>Cygnus atratus</i>	Black Swan	南の 白鳥	
3	クロエリハクチョウ <i>Cygnus melanocoryphus</i>	Black-necked Swan		
4	オオハクチョウ <i>Cygnus Cygnus Cygnus</i>	Whooper Swan	北の 白鳥	
5	ナキハクチョウ <i>Cygnus Cygnus baccinator</i>	Trumpeter Swan		
6	アメリカコハクチョウ <i>Cygnus columbianus columbianus</i>	Whistling Swan		Tundra Swan
7	コハクチョウ（ヨーロッパ型） <i>Cygnus columbianus bewickii</i>	Bewick's Swan		
8	コハクチョウ（アジア型） <i>Cygnus columbianus jankowskii</i>	Jankowski's Swan Eastern Bewick's Swan		

これは岩手県の北上市で、北上川に飛来する白鳥を観察しておられる村瀬正夫・美江さん夫妻が、北上の白鳥観察保護を引き継いでくれる後継者を育てたいという願いで書かれた「北上の白鳥を勉強しましょう（北上の子に教える白鳥の話）」という資料からお借りしたものです。

実は、北上川には毎年コハクチョウの亜種「アメリカコハクチョウ」が渡来・越冬しているのですが、その中の「クロチャン」と名づけたアメリカコハクチョウに、「カアサン」というコハクチョウのお嫁さんができ、亜種間交雑の子どもができてしまいました。

基本的には、交雑種を作りうる生物は同じ種であるとされていますので、上記のアメリカコハクチョウ、コハクチョウ（ヨーロッパ型）、コハクチョウ（アジア型）は、同一の種として扱われ、「日本産鳥類目録（改訂第6版）」では、日本の白鳥は、コブハクチョウ、ナキハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウの4種となっています。

驚くことには、村瀬さんご夫妻は、くちばしの黒と黄色の模様（ビルパターン）の違いから、固体識別をして、自費出版された「黒い嘴峰の仲間たち」の中で、クロチャン一族の系譜を資料3のようにまとめております。

さらに、この中に紹介されているクロチャン一家のいくつかが、渡りの貴重な中継地として、この間木堤を利用しているのです。

【資料3 :「クロチャン家族群の渡来状況」(村瀬正夫・美江「黒い嘴峰の仲間たち」より)】

ちなみに、1999年、クロチャンの孫「ヤン」が、つがいの「ソーリー」とともに7羽の幼鳥をつれて戻ってきておりますが、通常3～5個の産卵数といわれているコハクチョウにとって、本当に珍しいことであり、7羽もの幼鳥を完全に育てて日本に飛来したとは、何と素晴らしいことではありませんか（「日本の白鳥」No.23・24より）。

ところで、北海道のクッチャ口湖とその周辺の湖沼では、春秋の渡りの季節、延べ数万羽もの白鳥が、帰北の途中、中継地として立ち寄りますが、クッチャ口湖で白鳥の会の研修会が開かれた折、数千羽もの白鳥の中からクロチャンを見つけ、「クロチャン、クロチャン」と叫びながら呼び寄せ、北上から持参したパンを投げ与えては「寄ってきた！寄ってきた！」「食べた！食べた！」「いっぱい食べて！」と大喜びする村瀬さんご夫妻の姿を見たとき、「絆」というものは、刷り込み学習だけでは済まされないすごさのようなものを感じました。

それでは、また資料1の学名に戻ってみましょう。日本鳥類目録第6版では、日本に飛来してくる白鳥は4種類であると記録されております。俗名としては、コハクチョウを例に挙げると、日本では「コハクチョウ」ですが、英国では「ビウィックス・スワン（Bewick's Swan）」、米国では「ホイッスリング・スワン（Whistling Swan）」となります。以前の図鑑では、コハクチョウのことを「イースタン・ビウィックス・スワン（Eastern Bewick's Swan）」、つまりユーラシア大陸東方のビウィックス・スワンとして、ヨーロッパのコハクチョウと区別していました。今回の第6版では、アメリカコハクチョウやビウィックス・スワン、ホイッスリング・スワンなどのコハクチョウを全てあわせて、「ツンドラ・スワン（Tundra Swan）」とまとめられました。

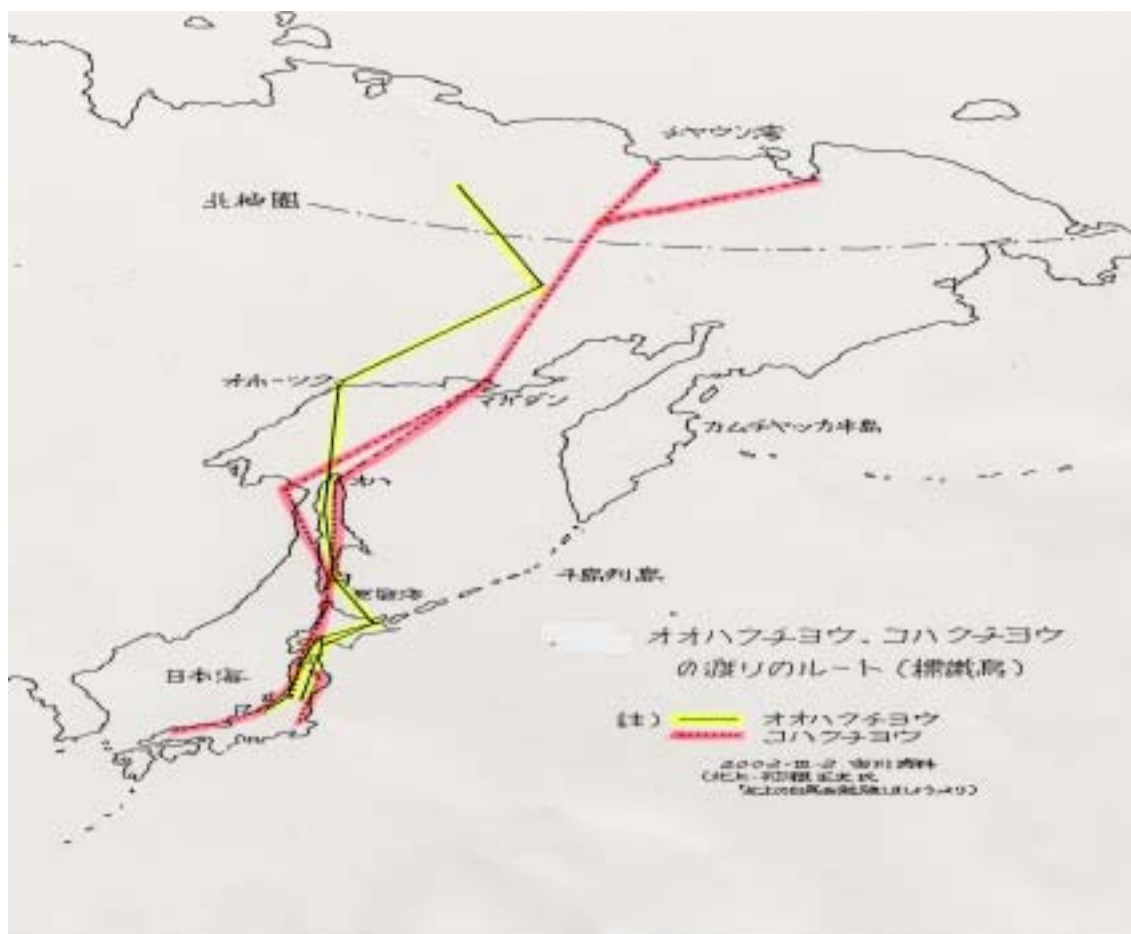
今現在この間木堤に多く飛来するのは「オオハクチョウ（*Cygnus cygnus cygnus*）」です。英名では口笛を吹くような鳴き声をすることから、「Whooper Swan」と名づけられます。アメリカに多く見られる「ナキハクチョウ（*Cygnus cygnus baccinator*）」は、もっと大きな鳴き声をしていることより、英名では「Trumpeter Swan」と呼ばれております。そして南の地方にしか見られないといわれている「コクチョウ（*Cygnus atratus*、英名 Black Swan）」と「クロエリハクチョウ（*Cygnus melanocoryphus*、英名 Black-necked Swan）」がいます。

ちなみに、日本で見られる主流の白鳥はオオハクチョウとコハクチョウですが、岩手県と宮城県では、ナキハクチョウが1992年の12月と3月に飛来していたという記録があります。アメリカコハクチョウについては、先ほど申し上げましたクロチャン一族をはじめ、全国各地で観察・記録されております。そしてコブハクチョウについてですが、実は六ヶ所村の鷹架沼で繁殖が確認されております。しかし、このコブハクチョウはおそらくどこかの動物園などから逃げ出したかごぬけであり、日本産ではない可能性が強いと思われます。ただし、野生のものとしては過去に一度だけ、八丈島で確認されており、こちらについては学者のみなさんが認めているところであります。これらの事例を考

慮した上で、現在の日本の白鳥として認められているのは、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ナキハクチョウ、コハクチョウの4種類ということになりました。

では次に白鳥の渡り・繁殖について、資料4をご覧ください。

【資料4：オオハクチョウ・コハクチョウの渡りのルート
(村瀬正夫氏「北上の白鳥を勉強しましょう」より)】



白鳥の渡りに関する調査について、以前は白鳥の首に識別リングを取り付け、その移動を調べるにより繁殖地等を推定しておりました。リングの色も、日本では緑、ロシアでは赤、米国アラスカでは青などの取り決めもされております。その後、白鳥に発信機を取り付けて調査した結果、さらに多くのことが分かってきました。オオハクチョウの渡り経路としては、日本海側にいたものは小湊から道東を通り、亜庭湾からサハリンへと抜けていきます。そしてオホーツクから北緯64度線付近のタイガと呼ばれる針葉樹林地帯の湿地で夏を過ごし、繁殖しているらしいことが分かりました。さらに北緯64度線を北上していくのはコハクチョウです。コハクチョウは北極圏のチャウン湾付近まで北上していきます。

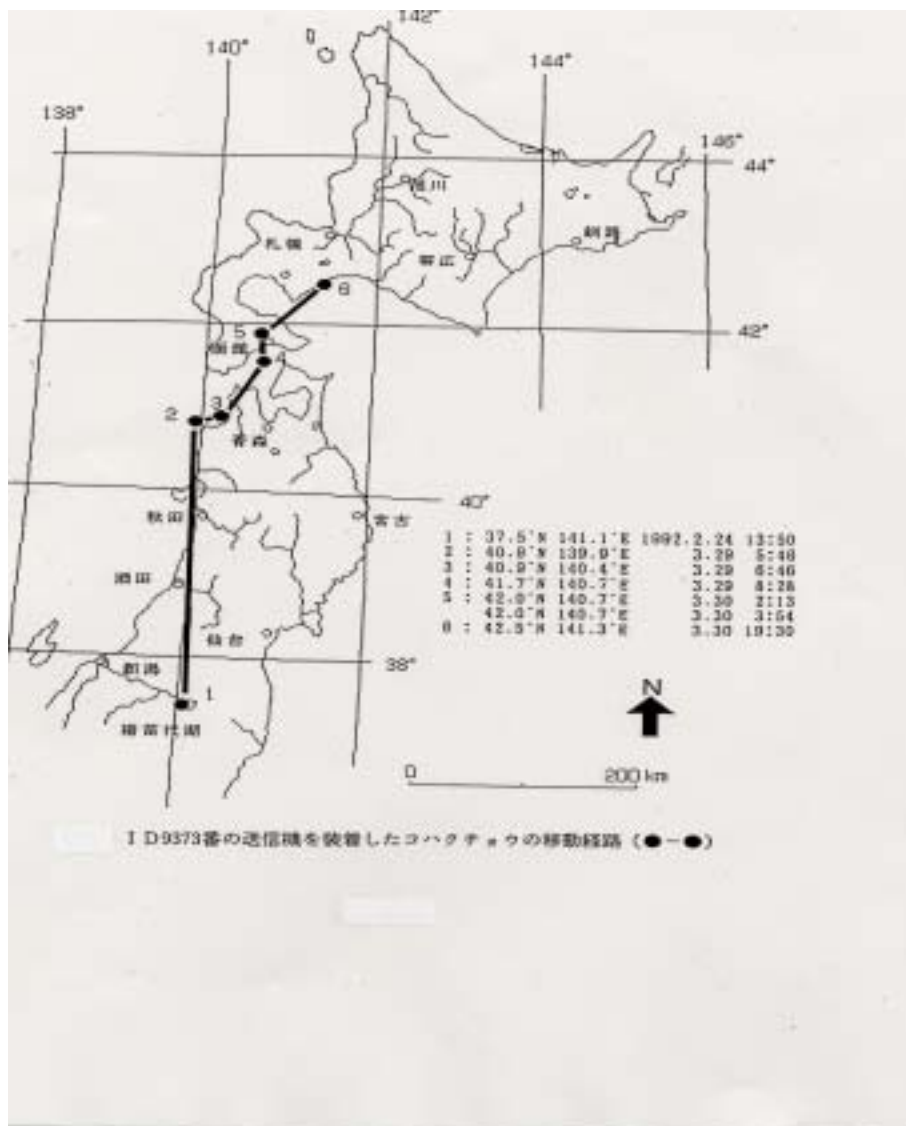
発信機を付けたオオハクチョウの中継地・繁殖地への移動についてですが、

青森県内では大湊や小川原湖周辺を中継し、道東から亜庭湾を中継し、アムール川付近で繁殖していることが分かります。

次に、資料5をご覧ください。福島県の猪苗代で発信機を付けたコハクチョウの移動の様子です。猪苗代から秋田を経由し、鱒ヶ沢から十三湖付近、十勝、そしてサハリンへ移動しているものと推定できます。オオハクチョウはさらに道東方面へ移動してからサハリンへ飛び立つのですが、コハクチョウはそのまますぐ北上していきます。また、オオハクチョウは亜庭湾でいったん休憩するのですが、コハクチョウは休憩せずにそのままサハリンを移動しているのは、先ほどの資料4を見ていただければ分かると思います。

このように、日本の白鳥として認められているのは4種類でしたが、やはり大半を占めるオオハクチョウとコハクチョウに関する研究事例は、他の2種類に比べて多いのです。

【資料5：ID9373の送信機を装着したコハクチョウの移動経路】



次に、白鳥の識別についてみてみましょう。白鳥は主にくちばしで識別します。鼻穴のところは黄色と黒の境目になっているもの、正面から見て黒・黄・白のパターンはオオハクチョウです。そして、正面からくちばしを見て、黒・白のパターンはまさしくコハクチョウであると三上士郎先生は識別しております。ここで、資料6をご覧ください。

【資料6：嘴峰による白鳥識別】



これは、メアリー・E・エバンスによるコハクチョウの固体識別ですが、ここではくちばしの上まで黒い部分がつながっているコハクチョウを「Darky」としています。三上先生はこれを「三上 型」と呼んでいます。次にダイヤモンド型のものをエバンスは「Pennyface」としていますが、三上先生はこれを「三上 型」として、オオハクチョウ型と三上 型との中間としています。次に「Yellowneb」ですが、三上先生はこれを「三上 型」と呼んでいます。三上先生はこれだけでなく、くちばしの裏側まで観察していました。三上 型のものは下くちばしの裏まで真っ黒、三上 型のものは下くちばしのふちは黒いが、真中の柔らかいところには黄色が残っている、三上 型のダイヤモンド型は黒いものもあれば黄色が残っているものもあります。私は以前、三上先生から「くちばしの裏も見て来い」といわれ、適当に「真っ黒でした」と答えただけでした。

この分類で三上先生が心配しておりましたのは、1980年に札幌で日本白鳥の会が主催する2回目の国際白鳥シンポジウムの際、「型と型の雑種ができた場合、雑種1代目またはそれ以降の固体の識別ははたして可能なのか」ということでした。この問題について、三上先生はエバンスさんに聞いてみたそうですが、「そこまでは分からない」とあっさり答えられたそうです。

資料7は、平成12(2000)年3月、ここ下田町で、日本白鳥の会の研修会を開催した際、むつ市の阿部誠一さんが、「青森県におけるハクチョウの渡来状況」について発表した中の、青森県内35ヶ所の白鳥飛来数の調査結果です。新聞等には、およそ4,500羽程と報じられたようですが、それはまだまだ未調査の地域があったからです。

今年(2002年)の調査結果では、県内49ヶ所で、1月13日には5,873羽、2月10日には4,238羽がカウントされています。

【資料7：青森県におけるハクチョウ類渡来地と羽数（2000年1月9日）】

昭和29年、新潟県の瓢湖で、飛来した白鳥が餌を与える人の手から直接餌を食べるようになりました。この例は、「白鳥の餌付けに初めて成功！」と新聞記事に掲載されました。小湊でも、昭和34年頃には餌を与えていた畠山正光さんに白鳥が寄ってくるようになりました。このように餌付けを行う以前、小湊では、白鳥の飛来数は秋口から1月頃にかけて増加し、1月中はほぼ横ばいが続き、そして2月半ば過ぎには南方から北上する白鳥が加わり増加、そして3月初めには0に近いくらいに激減するというパターンでした。これが昭和35年以前の冬の飛来数パターンでしたが、それ以降はこのパターンが変化してきます。4月頃になっても白鳥が数多く居残るようになってきています。これはおそらく餌付けが大きな影響を与えているものと思われる。

この餌付けか給餌かということは、いわゆる保護か過保護かという問題でもあります。日本白鳥の会では1回目の研修会的时候から、「餌付けは是か非か」ということで議論してきました。最初は「それぞれの渡来地によりけり」という考えでありました。しかし、その結果日本全国の白鳥飛来地は分散してきていることが調査から分かってきています。白鳥が餌を取る環境についても、本来は首を突っ込んで植物を食べられるような場所が望ましいのですが、そのような環境も次第に変わりつつあります。例えば日本最大の白鳥飛来地のひとつであります山形県の最上川酒田河口付近では、以前は白鳥が水田の落ち穂を食べているのが見られましたが、現在では流れの急峻な場所に餌場を作っている

ため、白鳥もここに集まり、白鳥の餌場そのものが変化しています。

昭和48(1973)年6月24日、IWRB(国際水禽研究局、現WI-国際湿地連合)の要請に基づく「国際白鳥会議」開催のための団体として、日本白鳥の会が結成されました。

日本白鳥の会は、本当に白鳥が大好きで、一日中白鳥の話をしていても尽きないという人たちの集まりです。「おらほの白鳥が一番」と言い合う、全国100人ほどの人たちでスタートし、1980年には、北海道札幌市において第2回白鳥会議が開かれました。近年の話題は、餌付けの是非の問題とともに、白鳥が安心して渡来・越冬できるような湿地そのものを保全しようというラムサール条約に基づく保護に、よりウェイトが置かれるようになってきました。

1993年、第5回ラムサール条約締約国会議が北海道釧路市で開かれるということで、私は定年前に退職して、この会議に参加しました。今もって家内にそのことを言われることもあります。私はこの会議に参加できて、本当に素晴らしい経験をすることができたと思っています。

まもなく春の雪どけ、白鳥が北へ旅立つ季節ですが、今も白鳥と一緒に寒さと格闘している方がいます。北海道最北の中継地クッチャロ湖の山内昇さんです。日毎に飛来しては飛び立つ数千羽の白鳥たちに対して、自分も湖に入り、氷を割り、餌を与える毎日なのです。この白鳥たちを、山内さんは「俺の白鳥」と言うのです。

本当にとりともない話でしたが、少しは話題提供になれば幸いです。どうもご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

「望ましい白鳥保護環境の創造」



コーディネーター

津曲 隆信（日本野鳥の会青森県支部三沢野鳥の会会長）

パネリスト

袴田 健義（下田町長）

川口 彰五郎（下田町観光協会会長）

蛭名 幸政（下田町白鳥保護監視員）

古川 博（日本白鳥の会副会長）

【司会者】

これよりパネルディスカッションを始めます。
本日のパネルディスカッションのテーマは、「望ましい白鳥保護環境の創造」となっております。それではコーディネーターの津曲先生、よろしくお願いいたします。

【津曲】

みなさんこんにちは。日本野鳥の会青森県支部三沢野鳥の会の津曲でございます。先ほど司会からのご説明の通り、本日のパネルディスカッションのテーマは「望ましい白鳥保護環境の創造」となっております。不慣れな進行でいたらないところも多いと思いますが、皆様よろしく願いたします。それでは、まず最初に、それぞれのパネリストから、それぞれの立場のお考えを伺いたしたいと思います。そしてさらに話をふくらませて、ご来場のみなさまからのご意見をいただきたいと思います。それではまず初めに、行政の立場からのご意見を、袴田町長より伺いたしたいと思います。

【袴田】

先ほど古川先生の基調講演を聴いておりまして、私もいろいろと勉強になりました。特に北上のクロチャンの話聞いて、白鳥に名前まで付けていることを初めて知って驚いています。この下田町の間木堤にも、クロチャンの一族が来ているのだらうと思うと、私も楽しみにしながら見ていなければならないと思っているところであります。

さて、この間木堤の白鳥を語るには、まず何よりも先に、最初に餌付けを行った類家一郎さんのことをお話ししなければならないと考えています。類家さんは本当に白鳥が大好きで、自分で白鳥の餌を見つけてきては、いつも餌付けをしておりました。私も類家さんと同じ町内会でしたので、そのことはよく存じているところでございます。類家さんの様々な苦勞や努力のおかげで、このように多くの白鳥が飛来するようになったということは、忘れてはならないことだと強く思います。

下田公園の中にこの間木堤があるわけですが、この堤は土地改良区の管理でありました。もともと公園部分は水田だったのですが、町で用地買収をし、公園として整備したものであります。公園整備工事はほぼ終了を迎えるわけでありまして、西側の山の中には、展望台やキャンプ場も整備しております。

つい一昨年前のことですが、木村県知事とのふれあいトークの際に、この白鳥の家を利用したわけですが、その際に木村知事から「ここは本当にすばらしいところだなあ」といわれております。

間木堤の白鳥が年々増えてくるにしたがい、訪れている観光客もそれとともに増えて増加しているものと思われまます。駐車場整備の計画もありますので、これからはさらにお客様が来ることが予想されます。しかし、公園整備にしても駐車場整備にしても、白鳥を初めとする生物が生息する環境を崩すのは許されないことであると思ひます。このように関係者のみなさんと話し合いながら、この間木堤のすばらしい生態系を守っていかなければならないと考えています。このような専門的な立場からのご意見は、これから白鳥保護監視員の蛸名さんや、野鳥の会津曲先生のご意見を十分参考にしながら、みなさんと一緒になって考えていきたいと考えております。

【津曲】

袴田町長どうもありがとうございました。それでは次に、この間木堤でいつも白鳥の世話をしておられる蛭名さんにお話を伺いたいと思います。蛭名さんからは、間木堤の白鳥と常に関わっているという立場から、これからの白鳥保護環境についてのお考えを伺います。よろしくお願いします。

【蛭名】

間木堤の白鳥についてですが、先ほど袴田町長からもお話がありましたとおり、昭和39年から類家一郎さんが22年間も餌付けを率先して行ったことにより、今のように多くの白鳥が飛来するようになりました。それから足かけ40年になりますが、この間木堤に訪れる白鳥には大きく分けて3つのタイプがあることが分かってきました。まず1つ目は、まったくここをねぐらとするもので、このタイプは朝になると目を覚ましてほかのところへ飛び立ち、夕方になると戻ってくるものです。次に2つ目は、餌を与える時間帯になると間木堤へ戻ってくるもの、そして3つ目にはねぐらとしてだけではなく、私とお客さんの与える餌に完全に頼って24時間移動しないものです。間木堤で見られる白鳥には、この3つの特徴があります。

今年は給餌で失敗したのではないと反省していることがあります。毎年間木堤には、10月半ばには白鳥が飛来してきます。今年の初飛来は10月18日だったのですが、その1ヶ月くらい前にカモの群がやってきます。そのころにはお客さんがたくさん来て、カモに餌を与えるものですから、だんだんとカモも人に慣れてきます。そうしているうちに白鳥が渡ってきますが、カモが餌を盛んに食べるため、なかなか白鳥が餌を食べることができないでいました。ですの、白鳥がしっかりと餌を食べられるような体制になるのに、11月までかかってしまいました。そうしているうちに今度は八戸から飛来するカモが増えて餌を取られてしまっていました。11月はこのような状態ばかり続いておりましたので、今年の延べ羽数は本当に少なかったと思います。ようやく例年通りの羽数になるのにはさらに1月までかかりました。今年1月のガン・カモ・ハクチョウ類の定点調査では、544羽を数えました。この数は、青森県内の餌付けを行っている飛来地の中では最も多い記録でした。2月の調査の時には481羽でしたが、それでも県内では最も多かったとされております。

また、この間木堤で死んでしまう白鳥の死亡原因ですが、私なりに推定して日誌に書き込んでおります。電線に引っかかって死ぬ白鳥、衰弱死してしまった白鳥、天敵にやられてしまった白鳥など、推定できるものについては死因をできるだけ書き留めております。この中でも、電線に引っかかって死んでしまう白鳥が今年は3羽おりました。白鳥が電線にぶつかる時の音というのは本当に大きな音で、まるで車か何かのぶつかったような音がします。このようにして電線にぶつかり、固い地面に落ちる白鳥はほとんど死亡しております。そういうことを考えますと、やはりこの電線というのを地下に埋設できるような

形になれば、本当にいいのではないかと考えています。

次に、公園整備についてですが、最近特にシャトルバスや老人ホームなどの施設の方が多く訪れるようになって感じるの、公園全体がバリアフリー化すればいいのではないかと考えています。現状ですと、駐車場から餌場へは階段で移動しなければならないので、車椅子のお客さんは移動が本当に厳しい状態です。スロープを設けるだけで、もっともっと多くのお客様が楽しく白鳥に触れ合える環境になると思います。トイレについても、障害者用のトイレを新しく設置し、白鳥の家への移動についても手すりなどを取り付ける配慮があってよいのではないかと考えているところです。また、新しく駐車場が東側に作られるそうですが、そうなった場合には道路を渡らなければならなくなりますので、スピードを出して走る車を規制するためにも、速度規制を設けたらいいのではと思います。

最後に、間木堤にはどうしても白鳥が安心して過ごせるような中州がありません。ちょっとした中州があれば、もっと白鳥を初めとする水鳥たちが安らぐことができるのではないかと考えています。

【津曲】

蛭名さんどうもありがとうございました。常に間木堤の白鳥と過ごしている蛭名さんからのご意見は、やはり貴重なものではないかと思っています。次に、観光的な立場から見た白鳥保護のあり方について、川口観光協会長に伺いたいと思います。

【川口】

先ほど行われました古川先生の基調講演、そしてディスカッションのお話は大変私にとって勉強になることばかりです。私からお話することは、そういった専門的な立場からではなく、あくまで観光的に見た白鳥保護環境の創造ということでお話を進めさせていただきます。

まず初めに、先ほど蛭名さんからもお話のありました「電線の地下埋設」についてですが、これは本当に必要なことではないかと強く思っております。電線に引っかかって死んでしまう白鳥がいることはもちろん、景観的に見ても下田町の代表的観光地である間木堤のすぐ近くに、数多くの電線が張り巡らされているというのは好ましいことではないと思います。

また、白鳥飛来地駐車場の計画についてであります。現在進められている計画によりますと、間木堤と駐車場が道路で隔てられる形で進められていると聞いています。しかし、訪れる人がストレスなく、しかも安全性を重視するのであれば、このような形での計画は好ましいとはいえません。やはり間木堤と駐車場を隣接させることが重要であると考えます。既存の道路は迂回させるようにするわけです。駐車場を作るのは、あくまで観光地に訪れる観光客のため

であって、既存の道路を基準にして作るものではないのです。駐車場の目的を観光地整備の一環として行うのであれば、道路の迂回を含めて見直しを行う必要があると強く感じています。

次に、観光地としての間木堤のあり方についてお話します。東北新幹線が八戸まで来ることになりまして、これからは首都圏や仙台などからも気軽に観光客が来るようになるものと考えられます。そのような場合に、やはり多くの観光客に対する受け入れ態勢が整っていないのではないかと思います。蛸名さんがお話されましたバリアフリー化はもちろんのこと、広域的な観光ルートにこの間木堤を組み込むような形にしていくことが必要です。広域的な遊歩道などを整備しながら、ルートとしてそれぞれの観光地を結び付け、より魅力あるものにしていく必要があります。ここでいう広域的というのは、隣の町同士ということだけではとどまりません。青森県を代表する観光地である十和田湖をも視野に入れて、例えば十和田湖や奥入瀬溪流を含めた新しい観光ルートを作り出すことまでできればいいのではないかと考えています。さらに、昔の小学校唱歌にあった「春の小川」の情景のような自然を再現させることも大切であると考えます。これらはなかなか大きな取組みであり、夢のような話でもありますが、ぜひ実現できればいいなと思っております。

【津曲】

川口会長どうもありがとうございました。この間木堤を一部の地域だけではなく、より広域的なものとして見る必要があるとのことでした。このように広域的な観光地となると、訪れる人にとっても更に魅力ある観光地として整備していくことが必要となってきますが、その場合にも、やはり自然環境や生態系を崩さないような配慮が必要となってくるのではないかと思います。それでは次に、総括的な立場から、古川先生のご意見を伺いたいと思います。

【古川】

この間木堤というところについては、私は本当に素晴らしいところではないかと思っております。というのも、白鳥と人との距離が近くて、親しみをもてるような場所だからです。また、間木堤は水の入替わりもあるようですので、水が比較的きれいな状態でもあるようです。

先ほどの講演の際にも申し上げましたが、日本白鳥の会では水鳥の生息できるような湿地を保全する「ラムサール条約」についても取り組んでおります。このラムサール条約というのは、正式名称を「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」というものであり、1971年にイランのラムサールで採決されたことよりこの条約名となっています。この条約は、湿地に生息する動植物の中でも、特に国境を越えて移動する水鳥を中心に、国際的にその生息地となる湿地を保全していくためのものです。ラムサール条約には、日

本では現在釧路湿原や宮城県伊豆沼・内沼、クッチャロ湖、新潟県瓢湖など、10ヵ所が登録されております。登録された場合には、環境省など、国の事業としての事業計画がなされ、保全のための計画や報告などを行うことが義務付けられるようになります。また、工事や整備なども自由に行うことができなくなるため、登録湿地を保有する自治体にとってはなかなか大変なことになります。しかしその反面、環境保護の面からはプラスになることが非常に多くあります。登録される条件としては、その湿地の規模などがまず気になるところがありますが、既に登録されている湿地で間木堤よりも小さいところがありますので、この間木堤ももしかしたらラムサール条約登録地となることもあるかもしれません。

なお、余談ですが、現在ラムサール条約登録地である北海道のクッチャロ湖に日本白鳥の会事務局があるのですが、ここで事務局を担当されている小西さんという方がおります。彼はもともと九州の人なのですが、学生時代にクッチャロ湖の白鳥に魅せられ、すっかりとりこになった人です。そしてこの地に永住したいという想いから、なんと浜頓別村の職員になり、現在に至っているとのことであります。

そのほか、間木堤の環境についてですが、先ほど蛭名さんのお話された中州があれば、もっと白鳥を初めとする水鳥が安心して過ごせるようになるのではないかと思います。中州というのは陸地と完全に分断されており、外敵の侵入が極めて少ないのです。このような環境がひとつ加わるだけで、水鳥の安心感は違ったものになると思います。実際にこのような人工中州を作っている事例もあり、その効果が報告されております。

【津曲】

古川先生どうもありがとうございました。ラムサール条約登録地になるというのは、水鳥の生息する自然環境を保護するためにはとても素晴らしいことだと思います。この間木堤も、一度にラムサール条約登録を目指すのではなく、県の指定地、国の指定地というように、段階を経ながらラムサール条約登録されるようなことになればいいと思います。それでは、これまでいただいたご意見から、更に問題点を吸い上げていきたいと思います。これまでのご意見に対し、何かございませんか。

【蛭名】

この間木堤の水の循環についてお話ししたいと思います。この間木堤から流れ出る水の量は、毎分20tになるといわれています。間木堤の全貯水量は84,800tですから、単純に計算すると約3日で循環されていることになります。ここまで短期間に全ての水が入れ替わることが実際にはないとしても、かなりの早さで水が循環していることになります。ですから水もわりときれいなほう

だと思っておりますし、実際に関東など遠くから訪れるカメラマンのかたがたからは、「間木堤の白鳥がどこよりもきれいだ」といわれております。

【津曲】

ありがとうございました。間木堤での水の循環はかなり早いものなのですね。それでは次に私の考えなのですが、この間木堤の堤防や柵が見えております。この堤防や柵が、自然景観的には余り好ましいものではないように思うのです。特に西側の水田との境目ですが、ここの柵などを取り払って、自然植生が発達すれば、間木堤と水田を自然につながれると思うのです。刈り取りの終わった水田や休耕田は、白鳥だけでなく多くの水鳥が餌をとったりすることのできる場所ですので、間木堤と水田が自然につながることはよいことではないかと思っております。また、この白鳥の家にはフロアの西側に望遠鏡が取り付けられ、その下は遊歩道となっておりますが、この遊歩道を白鳥の家東側に迂回させて、白鳥の家の窓辺まで間木堤の水辺がせまってくるようにすれば、もっと水鳥を身近に観察することができるのではないかと思っております。なかなか大変なことではあると思いますが、このような考えについてはみなさんいかがでしょうか。

【袴田】

今津曲先生からご意見がありました。間木堤の水辺をこの白鳥の家にくっつけるように作り直すというのは、やはり厳しいのではないかと思います。というのも、この間木堤は農業用灌漑用水の溜池として、土地改良区が管理していることになっているからです。また、この柵や堤防についても、町が単独で整備したものではなく、青森県の事業として整備したものでありますので、作り直すというのはやはり難しいと思われま。一昨年前にこの場所で行われた知事とのふれあいトークの際にこのようなお話が出ていれば、木村知事に直接聞いていただいて、県でも見直しをしていくことができたのかもしれない。現在のところ、町だけの考えで行うことはできないとしても、今日のような話し合いの場を多く設けて、自然環境への配慮を十分に検討しながらこれからの整備を進めていかなければならないと考えています。

【津曲】

やはり簡単にはできないことではあるのですが、これからもこのような話し合いの場をもって、自然環境を配慮した整備というものを行うことは大切なことですね。それではここで今日のフォーラムにお越しになっている皆様からもご意見を頂戴したいと思います。どなたかここはこうしてほしい、こうするべきではないか、というお考えがありましたら、伺いたいと思います。

【前川原】

先ほど町長より公園整備のお話がありましたが、現在の間木堤周辺では、展望台やキャンプ場、野球場、多目的グラウンドなど、非常に大きな施設ができている状態です。しかし、白鳥を初めとする自然環境を守っていかねばならないという考えからすれば、こうした施設が多くあることは好ましくないものと思われます。特に、夜間のグラウンドではナイター照明などが設置されていますが、こうしたことも自然環境に悪影響を与えるものなのではないでしょうか。

【津曲】

それでは今のご意見に対して、行政的立場から袴田町長よりお考えを伺います。

【袴田】

今のご意見についてであります。公園整備を行ったときはこうした自然環境への配慮というものに対して、それほど厳しい時代ではなかったという事実があります。しかし、これから整備を行う場合には、関係者の皆様と十分に協議を行い、この素晴らしい間木堤の自然環境を重視した計画を練っていくことが大切だと考えています。また、グラウンドのナイター照明については、白鳥をはじめとする水鳥にとって悪影響を与えるものだという調査結果が示された場合には、その使用についてもこれは考えていかねばならない問題だと思います。そうなった場合には、隣の自治体にもナイター付グラウンドや野球場があるわけですから、そちらを利用してもらうようにしてもよいのではないかと考えています。無理にこの間木堤に隣接するナイターを使用しなければならないというわけではありません。

【津曲】

他にはございませんか。

【馬場】

馬場と申します。先ほどの川口観光協会長のお話されておりました遊歩道整備についてですが、夢は夢であるとしても大変に素晴らしいお考えだと思います。しかし、大きな夢を実現する前に、まず初めにできることから事業を行っていくことが大切ではないかと思えます。例えば白鳥の餌となるマコモの栽培及び間木堤への移植ですが、結局はまだ実現できないでいる状態です。この取組みについては、観光協会や白鳥を愛する会で、これから真剣に取り組

んでいく必要があると強く感じます。

なお、間木堤へ流入する水路から流れる用水が汚く、異臭がすることがあります。おそらく上流にある生活廃水や工場廃棄物などが原因だと思われるので、規制が必要であると考えます。

最後に電線の地下埋設についてですが、本当に毎年多くの白鳥が引っかかって死んでしまう状況であります。環境面に関してもご理解のある町長でしょうから、この電線地下埋設については、何としても実現してほしいことであり、強く要望します。

【袴田】

確かに電線を地下埋設の形にすることは最も望ましいことではないかと思えます。これからもこのような話し合いを参考にしながら、前向きに検討していかなければならないことだと考えます。

また、用水路から流れる水の汚染については、上流から流れる工業排水が原因であると聞いております。町としても注意勧告をしているのですが、なかなか改善されていないのが現状であろうと思えます。これからも厳重に注意していくことが必要であると感じています。

【津曲】

ありがとうございました。他にはございませんか。

【苫米地】

間木堤周辺の水質環境についてお話したいと思えます。最近では週末になると、多くの家族連れの方々がこの間木堤に訪れ、白鳥にパンを与えるようになりました。このような状況になってくると、人為的な給餌による水質の悪化は相当なものではないかと思えます。間木堤で水の循環が行われているとしても、下流域に与える負担は相当なものではないかと思うのですが、この点についてはどうなのでしょう。

【姥名】

確かに週末になると、たくさんのお客さんが訪れ、800袋ものパンを販売することがあります。以前ですと、餌の量の調整がうまくいかなかったためか、下流にパンが流れて堆積し、カラスが群がっているということもありました。しかし最近では、白鳥やカモの満腹度によって餌の販売及び給餌の量を調整しております。給餌する際に白鳥やカモが餌をあまり食べないようなときには、お客さんへのパンの販売も抑えて、量を調整しています。

【津曲】

ありがとうございました。今まではこのような話し合いの機会はなかったと思います。このように有意義な意見交換していくことによって、さらに間木堤の自然環境を保全できるのであれば本当に素晴らしいことではないでしょうか。古川先生のほうからお話のありました「ラムサール条約登録」についてですが、もし本当にこの間木堤が登録されるようなことになれば、青森県では初めてのことであり、より水鳥を初めとする自然環境の保護を進めることができるのではないのでしょうか。

来年もおそらくこのフォーラムを開催することができると思いますが、その際には、今回のフォーラムで話し合われたことが少しでも多く実現していればいいなと強く願っております。不慣れな司会でしたが、皆様から貴重なご意見を伺うことができ本当に有意義なフォーラムだったと思います。パネリストの皆様、そして本日ご参加いただきました皆様、どうもありがとうございました。